

●みんなは、どんなお月さまが見たいかな？ いろんな月夜を想像してみよう！

- 満月が秋の夕べに大きく昇ってくる『十五夜』
- 雲に隠れて月が見えず、明かりだけを感じる『無月』
- 中秋の夜に雨が降り月を見られない『雨月』
- 満月直前の『十三夜』

というように、昔は”どのような状態の月もそれぞれに秋の風情”として鑑賞していました。

秋は最も「お月見」に適した季節です。

月の高度は夏ほど低くなく、冬ほど高くない、ちょうど良い位置で、春のように霞がかかるとなく空気が澄んでいるので、月はより一層明るく輝いて見えます。

気候も暑すぎず寒すぎず、外に出てゆっくり月を眺めるには心地よい季節ですね。

●縄文人もお月見をしていたかも？

日本人が「月を見る」「月の美しさを鑑賞する」ようになったのは、縄文時代だろうといわれるくらい、人は事あるごとにお月さまを見上げてきました。

また、平安～鎌倉時代を生きた、武士で僧侶で歌人の西行法師は、こんな句を詠んでいます。

「なにごとも 変はりのみゆく世の中に
おなじかげにて澄める月かな」

戦乱・激動の当時は、無常の世でもありました。西行は、こんな世の中でも月は古（いにしえ）と変わることなく光を放ち澄み輝いている…と、月の光が不変であることを感じていたのでしょうか。

私たちも、西行が感慨深く見上げた時と同じ月を見ているのです。





●お月見文化は中国から

名月を鑑賞する、いわゆる「お月見」は、中国の唐から日本に伝わり、十五夜の月を鑑賞したことが初めて記録に残されているのは平安時代だといえます。当時の貴族たちの間では十三夜とともに、種々の供物をそなえて名月を愛で、月見酒を酌み交わし、詩歌管弦・舞楽・歌合せといった宴が繰り広げられました。また、お庭・植え込み（前栽）を作っては、池に船を浮かべて月見をするといった風流で優雅な遊びもあったとか・・・。

●お月さまに豊穡を祈り、自然と心を通わせる

鎌倉・室町時代になると、貴族階級からお月見も武士・庶民へと広がります。この頃から農耕儀礼と結びついた風習が色濃くなり、神々に豊穡を感謝する行事が定着しました。

江戸時代になると、ますます庶民の行事・収穫祭の意味合いが濃くなります。収穫された芋を煮て、夜通しお祭りを楽しみました。稲の初穂やお月見団子、里芋、お酒などをお供えするようになったのもこの頃です。また、十五夜や十三夜だけでなく、月の満ち欠けに心を寄せ、お月さまを神聖なものとして自然と心を通わせる、日本人独特の文化が定着していきました。



●お月見とススキはセット？

豊作祈願と収穫感謝の行事として、また、神様の依代（よりしろ。寄り付くもの、宿るもの）として、はじめは「初穂」（その年初めて収穫された稲穂）をお供えしていましたが、十五夜は稲刈りの前なので、稲穂に似ているススキが供えられるようになりました。

そういわれてみると、風になびく姿がよく似ていますよね。

●お月さまに秋の実りをお供え

お供えものはお月様に見えるよう縁側や庭の小机にかざられました。
ススキやお月見団子は今でもよく見かけますが、
他に秋の七草をいけたり、季節のお野菜・実物や豆などを
飾ったりします。



●お月さまは子どものどろぼう大歓迎！？

お月見のお供えものは、食べてもらうと縁起がよいとされています。

「お供えものを盗られた家は豊作になる」
「お供えものを食べた子供は長生きする」と
いわれたとか。

これは、気づかないうちに神様が食べてくれた」
「子どもは神様のおつかい」という考え方に
つながっていきます。ここから、子どもが家々で
「お月見くださ〜い！」と声をかけて

おやつをもらうという風習に変化し、お菓子を
配る現代のイベントに残っているんですね。

みんなの地域は「お月見どろぼう」やってるかな？

